

言説資源としてのミルズ大衆社会論と「脱領域的な労働者文学」

——久保田正文の言説に注目して——

筑波大学大学院 野上亮

1. 目的

労働者文学の呼称やあり方をめぐっては、終戦直後から論争が繰り広げられていた。代表的なのは、「勤労者文学」を掲げる徳永直らと、あくまでも階級意識に根ざした「民主主義文学」を提唱する宮本百合子らとの論争である。両者は担い手の階級意識の有無などを争ったが、労働者文学という固有の領域を設けることについて両者は一致していた。これに対し、労働者文学という固有の領域を取り払う、言わば「脱領域的」な労働者文学を構想したのが文芸評論家の久保田正文である。本発表は、一貫して労働者の自己表現を支援し続けた久保田が、どのような根拠でそのような「脱領域的」な労働者文学を提唱したのか、その思考方法について迫ることを目的とする。

2. 方法

久保田正文『労働者文学の条件』（1965）を中心とした久保田の言説を分析の主な対象とし、『新日本文学』や『月刊社会党』等で展開された彼の周辺の議論を検討する。

3. 結果

久保田によると、徳永や宮本らの議論の前提として、労働者文学と「働かない者の文学」が対置されており、「労働者」は主として肉体労働者が、「働かない者」は思想家等の知識労働者が想定されている。しかし、そもそも知識労働も「労働」である。そして、ミルズの大衆社会論を下敷きに、現代の労働は、ブルーカラー労働も「ホワイトカラー化」し、もはや従来の論争が前提としていた労働者像が成り立たないことを久保田は指摘する。そのうえで、労働者文学の枠を取り払い、その表現の対象や手法を多様化させることを主張した。

4. 結論

久保田の思考方法は、ミルズの大衆社会論を下敷きとしながら、労働者の概念を問い直すことと文学構想を結び付けることに特色があった。彼が構想する「脱領域的」な労働者文学論は、労働者文学の言説や実際の作品創作に多大な影響をもたらした。第1に、彼の主張が、その後の労働者文学の議論の言説の地平を切り拓いたことである。批判するにせよ、賛同するにせよ、彼の論が議論の出発点になった。第2に、久保田に批判的な主張も、久保田と同様社会学的な知見を参照する思考方法をとる例が出てきた。久保田を批判するにあたって、久保田と同様の思考方法をとる必要が出てきたことは注目に値する。久保田の「脱領域的」な労働者文学は、その構想がどこまで実現したかは議論の余地がある。しかし、少なくとも労働者文学を議論するうえでの基盤を、思考方法を含めて提供したことは確かである。

文献

久保田正文、1965、『労働者文学の条件』、現代書房

C.Wright Mills. (1951) *White Collar ?The American Middle Class* — .Oxford University Press. 他